



16 蘭陵王置物

海野勝珉
一式

明治二十三年（一八九〇）
銅・金・四分一ほか、鑄造・鍛造・彫金
本体・二八・〇×三二・〇×三三・五

水戸の装剣金工の出身である海野勝珉（一八四四〜一九一五）は、明治二十三年（一八九〇）の第三回内国勸業博覧会に出品されて一等妙技賞を受賞した本作を始め、一九〇〇年のパリ万国博覧会に出品した《太平楽置物》（当館蔵）など、器物ではない立像の置物制作にもすぐれた技量を発揮した。金工諸分野のなかでは、鑄金はその制作手法から最も彫刻（彫塑）に近接していたが、一方で幕末まで刀装具を制作していた装剣金工の出身者は、西洋の近代的な彫刻観とは無縁の存在であった。しかし、その金属を彫る、嵌める（象嵌）といった装剣金工に用いられる技術を駆使しつつ、パーツごとに制作された部位を、外側から接合の様子がわからないように組み上げて完成させたのが本作品である。

舞楽蘭陵王の演者の装束の文様を象嵌や彫りで、柔らかな襷の様子を鍛造で立体的に表わしている。装束の色に合わせて煮色着色した金属や、文様の高低を高肉象嵌、平象嵌を駆使しながら、金属素材の色味を活かして色彩の再現をも意図している点も特筆される。面を取り外すと、その下から演者の顔が現れる仕掛けなど、江戸時代の細工物のような趣向も残しているが、刀の鏝などに用いられた彫金技法が立像のなかに巧みに活かされており、近世までの金工とは全く異なる地平に到達した作品であると見えよう。



蘭陵王の舞楽装束である裯襦(りょうとう)は銅を鍛造し、周囲に銀で鑄造した房飾りを蝋付けして、部分的に金釘でリベット留めしている。裯襦の文様のうち、龍は金、龍を取り巻く円は銀で高肉象嵌され、散雲の地文様は金、銀、四分一、赤銅などで高肉象嵌されている。腰で結ばれている紐は、紐と房の部分の色異なる銅で作分けられている。手は四分一の鑄造である。

演者の素顔は四分一の鑄造で作られ、
頭髪は蠟付けされた赤銅で表わされ
ている。眉も赤銅、瞳は赤銅と四分一
を象嵌している。頭部の牟子(むし)
は銅を鍛造して、四手雲の地文様を金
で平象嵌している。



面箱と面、桴(ばち)。面左下の銀板には「海野勝珉作」の彫銘がある。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

明治美術の一断面——研ぎ澄まされた技と美

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 82

編集 宮内庁三の丸尚蔵館
制作 株式会社 東京美術
翻訳 黒川廣子
発行 宮内庁
平成三十年十一月三日発行

© 2018, The Museum of the Imperial Collections, Sanjūmaru Shōzōkan